

科学する心を育てる
～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～



つながる めぐる ふかまる

～自然や人との関わりからはぐくまれる科学する心～



目次

1 はじめに	
(1) 本園の取組と「科学する心」について	… 1
(2) 研究の構想	… 1
2 日々の実践から	
(1) 保育者との温かい関わりを基盤に好奇心が芽生える	
エピソード1 3歳児 自然との出会いの中で	… 2
(2) 友達との関わりを通して広がっていく好奇心・探求心	
エピソード2 3歳児 サクランボと初めて出会うアオの姿を通して	… 4
エピソード3 4歳児 どうする?たんぼぼ組	… 7
エピソード4 5歳児 サクランボを守れ! 大作戦!	… 8
エピソード5 5歳児 こだわりをもって“流したい” ウォータースライダー	… 9
(3) 保護者・地域の人との関わりから新たな好奇心が芽生えていく	
エピソード6 カブトエビ 発見!	… 12
エピソード7 園庭も生きている	… 13
3 まとめ	… 15

つながる めぐる ふかまる
 ～自然・人との関わりを通してはぐくまれる“科学する心”～

Ⅰ はじめに

(1)本園の取組と「科学する心」について

本園の子どもたちは安心感を基盤に、日々いろいろなことに好奇心・探求心をもち、“ほっと（安心感）・もっと（意欲）・やった（自信・自己肯定感）”を繰り返しながら、主体的に自分のやりたいことに夢中になって遊んでいる姿がある。本園では2022年度より“ほっと・もっと・やった”を軸に好奇心・探求心の芽生えを“科学する心”として捉え、実践を積み重ねている。昨年は、子どもたちの内面理解をしていくために、感情の動きやその細分化など、心の動きをより丁寧に読み取っていった。一言で「楽しい」という言葉にも、様々な“対話”により感情がつながり、めぐり、絡み合い、これまでの経験や知識を活かしつつ、新たな気付きや思いが芽生え、好奇心や探求心＝“科学する心”が絶え間なく生まれていくことが分かった。

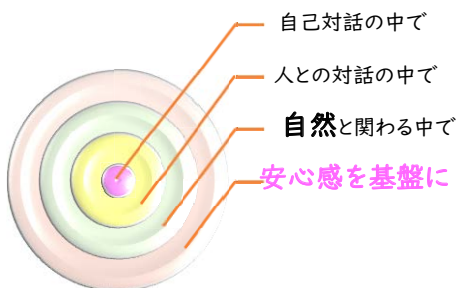
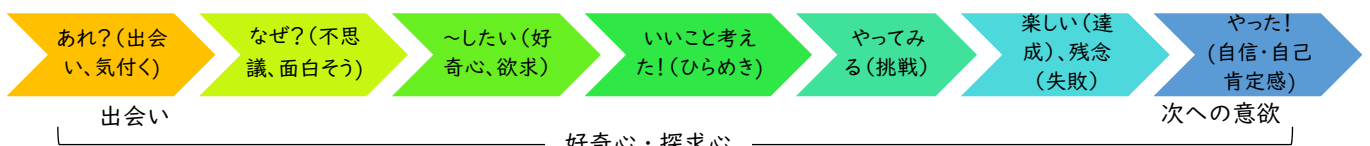
今年度入園し1か月が過ぎた3歳児が、クラスの前に置いたプランターに朝顔の種を蒔いた。種は土で見えないが、毎日「まだだね」と言いながら保育者と一緒にペットボトルジョウロで水遣りをしている。1週間が過ぎた頃、次々と芽が出てきた。すると「この子はお水飲んでるね。この子は飲んでないね・・・」と、プランターにいくつも芽が出ている朝顔の根もとの土の濡れ具合を確認しながら、一つ一つの小さな芽の生きている姿とまっすぐに向き合っている。何気なく見過ごしてしまいがちな一瞬の子どもと言動には、様々な好奇心と探求心が詰まっていると感じた瞬間だった。そこで今年度は、一人一人の興味・関心から生まれる好奇心や探求心が、自然や人との関わりを通してどのようにつながりめぐり深まっていくのか、子どもの資質・能力（意欲、思考力、判断力、言語力、表現力、協同性等）がどのようにはぐくまれていくのかを探っていききたい。そして、保育者自身も子どもとともに心動かし“科学する心”をもってその面白さを探求していききたい。

(2)研究の構想

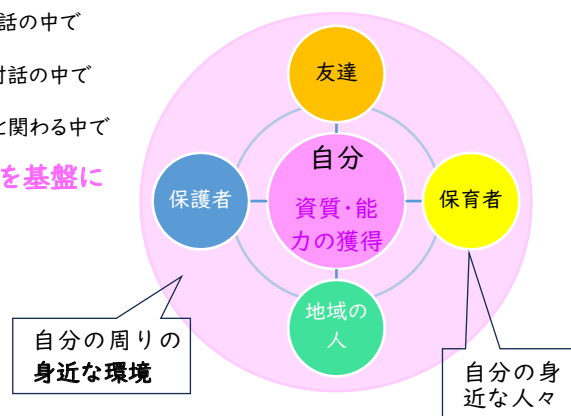
昨年度、心の動き（図①），“対話”による思考のめぐり（図②）を、感情の読み取りから捉え、好奇心や探求心につながっているのを探ってきた。その中で、安心感が基盤となっていることを改めて実感するとともに、人との関わりが子どもの豊かな心を育むのにとっても大切だということが分かってきた。

そこで、今年度は園の環境や人（保育者、子ども同士、保護者・地域の人）との関わり（図③）を通して、子どもたちが自分の知らない新しい情報と出会い、それをどのようにつないだりめぐらせたり、それが自分自身の思考の深まりになったりしていくのか（図④）を読み取って行く。また、その過程を捉えていきながら、好奇心・探求心や資質・能力がはぐくまれる姿を探っていききたい。

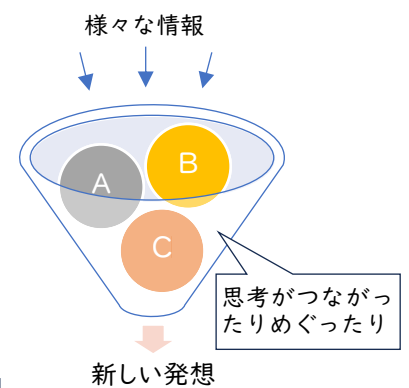
図① 心の動き(仮定)



図② “対話”による思考のめぐり



図③ 自分の周りの身近な環境の中での人との関わり



図④ 新たな好奇心・探求心の芽生え

2 日々の実践から

(1) 保育者との温かい関わりを基盤に、好奇心が芽生える

エピソード1 3歳児 自然との出会いの中で (2023年4月～6月)

<場面①>

4月18日、リンとナツが園庭の隅にある雑草が生い茂った場所、通称“むしのくに”で同じカップを持ちカラスノエンドウを集めている。保育者が「いっぱい採れたね」と言うと、二人も「いっぱいだね～」と同じ言葉を繰り返す。自分でも採っているリンは、ナツがたくさん採っているのを見ると「リンもいる」と言う。ナツは自分が採ったカラスノエンドウをリンのカップに入れる。「ありがとう」とリン。リンもお返しにナツのカップに自分で採ったカラスノエンドウをそっと入れる。

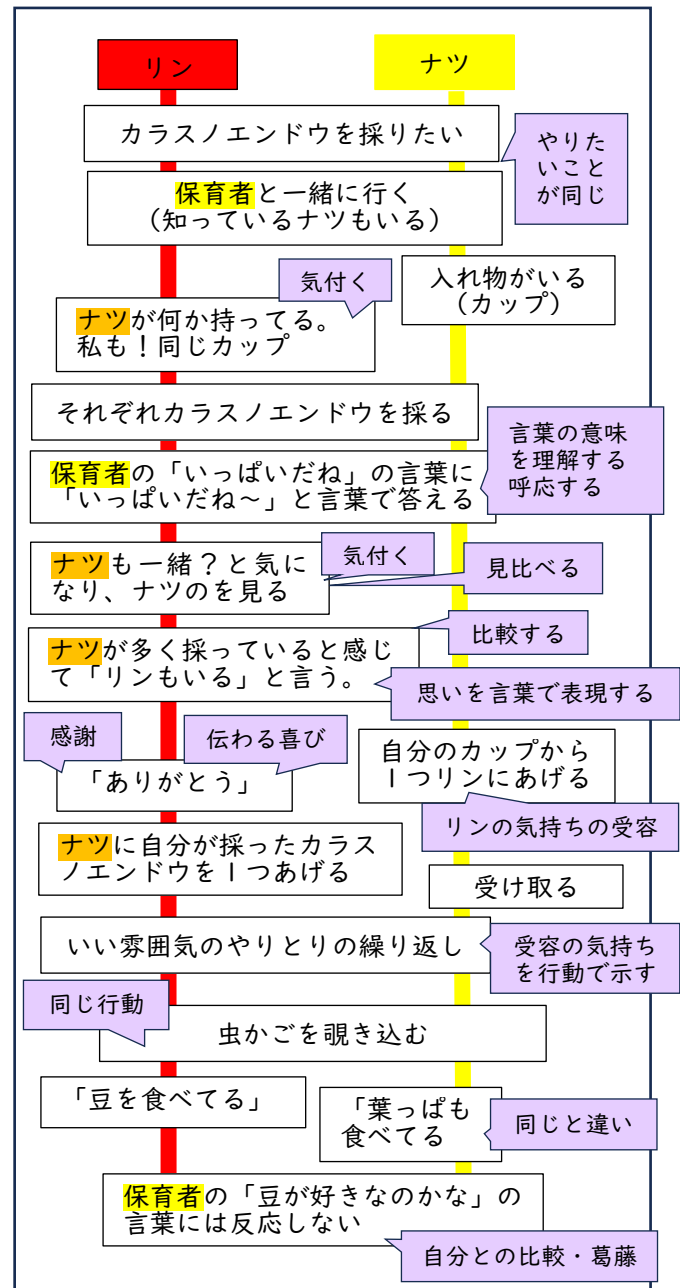


<場面②>

やり取り(場面①)がしばらく続いた後、リンとナツの横にあるテントウムシとカラスノエンドウが入った虫かごを覗き込む2人。すると「テントウムシが豆(カラスノエンドウ)を食べてる」とリン。葉っぱに乗っているテントウムシを見て「葉っぱも食べてるね」とナツ。「テントウムシさんは豆が好きなのかな」と保育者が言ってみるが、その言葉には反応しない。



- 当初リンとナツは、自分のやりたいこと(カラスノエンドウを採りたい)や先生と一緒にがいい(先生と一緒に～したい)という思いが、たまたま同じ思いだったのではないかと想像する。気持ちが同じだったことで、保育者を媒介としながら、自分と先生以外の“友達”(気持ち的にはそこまで思っていないと思われる)という存在を意識し始めている。
- 同じカップ、同じ言葉を繰り返す、同じ行動をする、といった“同じ”ということが2人にとってはとても大事であるように感じる。同じことを見出し、同じという安心感や一緒という同調性が生まれている。お互いが安心できる存在として認められていく過程ではないだろうか。
- カラスノエンドウの葉や実に乗っているテントウムシを見て、自分の体験をもとに菜っ葉や豆を食べている自身と置き換えながらも、どうやって食べているのかジーンと見つめ続ける姿から、食べていると思いつつも本当に食べているかどうかという小さな疑問をもちつつある姿であるとも感じ取れる。また、葉っぱ「も」と言ったナツ。“同じ”を見つけ出しているのかもしれない。
- 無自覚な意識を働かせながら、友達の持っているものに気付く、同じものを持ちたい、いっぱいという感覚を先生の言葉を真似て理解する、言葉で表現することで相手に伝えることを知る、自分の欲求に応えてくれた嬉しさを感じ、相手にも同じようにしてみる、など、一人でないからこそ、気付く、喜び、比較、言葉等の芽生えや感情の豊かさがはぐくまれている。



<場面③>

4月19日、朝からリンとナツは昨日のカップを持って一緒にカラスノエンドウを採りに行く。保育者がカラスノエンドウの鞘から豆を取り出しているのを見て、リンはその豆を「テントウムシさんのご飯にする」と言う。テラスに置いていたテントウムシの虫かごに、一粒一粒小さな豆を入れ上から覗き込むと「豆、食べてる」とリン。しばらくすると昨日と同じように「葉っぱも食べてる」とナツが言う。



<場面④>

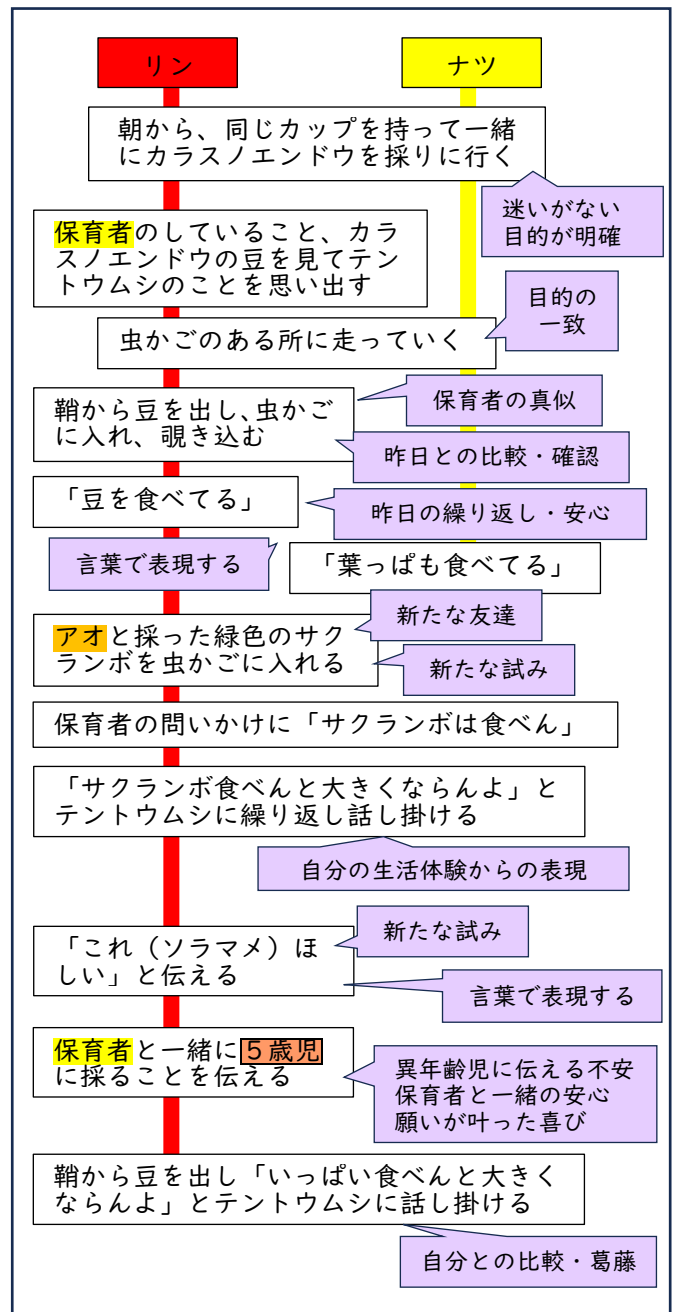
リンは、アオと一緒に採った緑色のサクラランボを手に取り虫かごに入れる。「サクラランボ食べた？」と保育者が聞くと「サクラランボ食べん」と答える。そして「サクラランボ食べんと大きくならんよ」と虫かごのテントウムシに繰り返し話しかける姿があった。

<場面⑤>

4月24日、リンは「これがほしい」と5歳児が育てている畑のソラマメを指さす。保育者と一緒に5歳児に採る確認をしに行きOKをもらおうと、リンは鞘から豆を取り出しテントウムシの虫かごに入れる。「いっぱい食べんと大きくならんよ」と言いながら虫かごを覗き込むリン。テントウムシのことを忘れず、毎日確認する姿に驚く。

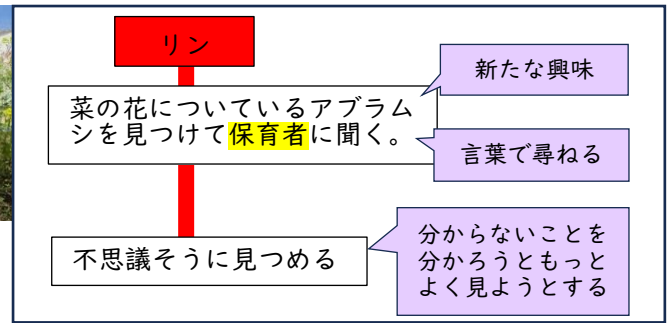


- 小さくて見えにくいテントウムシ。リンの中で、動き回るテントウムシがじっと豆や葉の上で動かないと食べているように見えるのだろうか、それとも～に違いないという願いとして見たままを自分の知っている言葉の中から一番近いと思われる言葉で表現しようとしているのだろうか。
- 同じ言葉と呼応し合うことで“一緒”“友達”という意識の芽生えが生まれているように感じる。
- リンはこれまでの自分の経験を通して「食べないと大きくならんよ」という言葉をテントウムシに話しかけているのかもしれない。ままごとのようなごっこ遊びだけでなく、自然と触れ合う中でも、自分の生活の中の出来事がつながっていると感じる。
- リンはここ数日、他にも草花や野菜はあるのに、ソラマメを欲しがり、それにこだわっていた。「サクラランボは食べていない、他の物を入れてみよう」と思い、ソラマメを選んだのだろうか。あるいは、カラスノエンドウの豆は食べている(リンの思い)から、同じような形のソラマメも食べるかもしれないと考えたのかもしれない。また、テントウムシの体が小さいままでなかなか大きくならんよと感じ、カラスノエンドウより大きなソラマメを選んだのかもしれない。



<場面⑥>

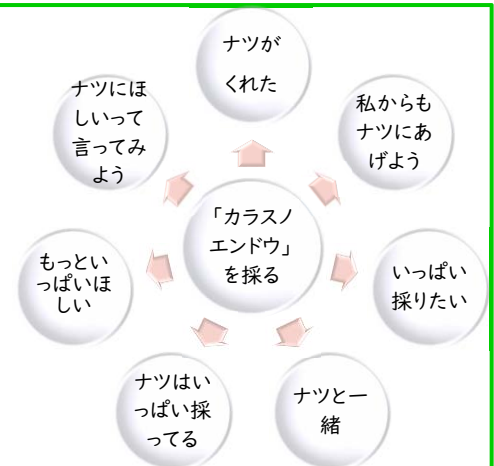
5月9日、畑に咲いていた菜の花の時期が過ぎ、子どもたちは菜の花の茎を引っぱって抜くことを楽しんでいた。リンは「先生これなあに？」と菜の花についているアブラムシを見つけて保育者に聞く。「なんだろうねえ。小さい虫がいっぱいだね」と保育者が応えると、リンはその後も不思議そうにアブラムシを見つめていた。



- テントウムシよりも小さな虫がいることに気付くリン。カラスノエンドウ→テントウムシ→アブラムシと、こうやって自然との出会いが繋がっていき、リンは自分自身の成長と共に自然のつながりやめぐりをこれから一つずつ知っていくのだろう。
- 周りからの知識の情報を得ていないリンは、見たまを素直に表現しつつ、新たな「何?」「なぜ?」という不思議さを感じている。子どもの好奇心を妨げない保育者の関わりが大事になってくると思う。

【考察】

- 本当のことをまだ知らず見たまを捉え、自分が知っている精一杯の言葉で自分の気持ちを伝えようとする3歳児。ちょっとした小さないろいろな気付きを自分のものとして獲得しようとする姿が見られる。リンの姿を見ていくと、気持ちが不安定な時期だからこそ「同じ」ことをすることで不安を取り除き安心を得ようとするのではないかと感じる。また一方で、嬉しいことがあるとその心地よさを味わいたくて同じような行動を繰り返す。子どもたちは保育者の温かい関わりを基盤に安心できる居場所を作っているながら、好奇心や探求心の芽生えが生まれてきている。
- 子どもたちは、いつ、どんな過程で、新しい知識・経験として、こうなんだという事実として捉えられていくのかとても興味深い。自然や生き物の生態に限ったことではなく、人との関わりも本人なりの興味や関心があってこそつながっていくものなのかもしれない。
- 初めての園生活では新しい出会いでいっぱいである。その中で一人一人の興味や関心、好奇心は違っている。同じ遊びをしていても心揺さぶられるものは一人一人違い、呼応することによってその相違が明らかになっていく。またその相違があるからこそ、共感、同調、対話などが生まれ、好奇心や探求心の芽生えにつながっていく一歩となるのだと感じた。



(2) 人(保育者・友達)との関わりを通して、広がっていく好奇心・探求心

～サクランボとの出会いを積み重ねていく中で・・・3・4・5歳児の姿から～

エピソード2 3歳児 サクランボと初めての出会い アオの姿を通して (2023年4月)

— 「これなあに？」(4月19日)【サクランボ】—

カラスノエンドウを集めていたアオ、リンは園庭のサクランボの木の実を触りながら「これなあに？」と保育者に聞いてきた。保育者は木に吊り下げている名札を指さし「サクランボって書いてるね」と答える。そして「サクランボの実が赤くなったら、みんなで食べようね。今は緑色だからまだ食べられないの」と伝える。「うん」と2人は答えるが、2人の手はサクランボの実に伸び、1つつ実を採ってカップや虫かごに入っていた。

— 「赤くなったかな？」(4月20日)

園庭のサクランボが気になっていたアオは、今日も緑色のサクランボを採って大事そうにポケットに入っていた。「赤くなってないねえ」と採ったサクランボを見ながら保育者と話す。午後からも「サクランボが赤くなったか見に行く」と言い、何度も園庭まで確認をしに行く。保育者が「どう?」と聞くと、その度に「まだ赤

くなっていない」と言う。そして、毎回一粒採ってポケットの中に入れる。「緑色のはまだ食べられないねえ。赤くなったら食べようね」と**保育者**が昨日と同じように伝えるが、どうしても採りたいようだ。採ったサクランボ2つを見て「ランくん（兄）の分もあるね」と**アオ**。そして、どう思ったのか職員室でナイロン袋をもらって来ると、ポケットに入れていたサクランボを入れる。アオは30秒毎くらいに「赤くなったかな？」と袋に入ったサクランボを確認していた。

— 「水の中に入れると赤くなるから」 —（4月21日）

朝、**アオ**は一目散にサクランボの木を確認しに行く。「赤くなってるー！！」とアオの声。確かに昨日と比べたら実が少し赤みがかっていた。その後、何度もサクランボを確認しに行っては赤い実を探し、一粒採る。背伸びをして上の方を探している姿から、赤い実は上の方に付いていることをアオなりに気づき始めたのかもしれない。

長く手に持っている、サクランボの皮がツルっとむけてしまった。**保育者**が「袋に入れる？」と聞くと「うん」とナイロン袋に入れたあと、さらに水を入れ、サクランボが浮いているのを見ながら「プールみたい」と嬉しそうな表情。

この日を境に、毎日水の中にサクランボを入れる**アオ**に「水の中にサクランボを入れるのはどうして？」と**保育者**が聞くと「水の中に入れたら赤くなるから」とのこと。**アオ**の中では水があることで赤く熟していくように見えたのかもしれない。また、この日、**保育者**が「赤くなってるね。食べてもいいよ」と伝えるが、**アオ**は食わずに「持って帰る」と言う。

4・5歳児がカラス対策を考えていたことを**アオ**に伝える。**アオ**は**年長児**が考えて作ったお化けの絵を見て「怖い紙がある」と言いながら、そのカラス対策に「いいね」と頷いている。

— 「これだ！」 —（4月24日）

朝一番「サクランボを見に行く」と言う**アオ**と、どのくらい赤くなれば食べられるのか、**保育者**と一緒に図鑑でサクランボのページを開いてみる。図鑑には様々な品種のサクランボの実が載っている。**アオ**は金曜日に採ったサクランボと図鑑を見比べ、園庭のサクランボの色に一番近いものを指さし「これだ！」と大きな声を出して興奮した様子。その後、図鑑を持って、また園庭のサクランボの木まで駆けて行く。図鑑と見比べながらアオなりに赤くなっているかを見比べる姿があった。

また、木の周りには**5歳児**が作ったかかしや、ネットがされていたが、**アオ**は特にそれには触れず、ネットのすき間を見つけて入っていき、サクランボを一つ採る。今日採った分は「**ママ**にあげる」金曜日に採った2粒は「僕とラン君（兄）の」と言っていた。**アオ**は手当たり次第サクランボを採っているのではない、自分の中で考えや思いがあって採っていると感じた。しばらくすると、**リン**も来て「リンもサクランボ欲しい」と言い、同じようにネットのすき間をもぐり、サクランボの柄ごと採る（2粒付き）。リンは赤い方の実だけを採り、緑色の実をポイっと捨てていた。これまでにサクランボを食べた経験や「緑の実はまだ食べられないよ」という**保育者**の言葉から赤色の実だけを選んだのかもしれない。**リン**はサクランボを嬉しそうに、そして少し恥ずかしそうにうつつき加減で食べていた。

— 「おいしい」 —（4月25日）

サクランボを採って食べる。子どもたちは自分で採りたい実を選んで食べていた。**3歳児**も赤い実を選んで採ろうとする姿があった。**アオ**は、赤いサクランボを一粒採って食べ「おいしい」とつぶやいた。



— 「プールみたいで面白い」 — (4月27日)

コトミがサクラの実(赤と緑のツートンカラーの実)を拾って大事そうに保育者に見せてきた。「どこで採ったの?」と聞くと「あっち」とサクラの木を指さす。「先生も同じの見つけてみようかな」と探しに行ってみる。同じ実を拾い「見つけたよ。同じだね」と言って掌に載せて見せる。コトミも「同じだね。コトミのは1つだけど、先生のは2つ付いているね」と言う。そして「このサクランボにはカラスさんは来ないの?」と保育者に聞く。「本当だね。カラスさん、この実は食べてないね」と返す。サクランボとよく似たサクラの実。コトミの中ではどうしてこっちにはカラスが来ないのだろうと不思議に感じたのかも知れない。



サクラの実を持って帰るといので、袋を取りに行く。アオがサクランボを袋に入れ、水を入れているのを見ていたコトミは、自分もサクラの実が入った袋に水を入れる。コトミはサクラの実を見ながら「プールみたいで面白い」と嬉しそう。コトミとアオは水と実が入ったそれぞれの袋を大事そうに持って帰った。

— 「サクランボ!」 — (5月10日)

粘土を丸く転がし、サクランボを作って遊ぶ子どもたち。園庭のサクランボはもう実が付いていない。そこで、紙粘土に絵の具で緑、オレンジ、赤とそれぞれ色を付け、サクランボを製作する。紙粘土は感触がとても柔らかく「サクランボがつぶれないようにそ〜っと丸めてね」と保育者が伝えると、みんなやさしい力加減で丸めようとする。大きなサクランボを作る子もいれば、赤と緑の粘土を混ぜツートンカラーの実にする子もいて、それぞれが今感じているまに表現している姿がある。保育者はこれまでの活動(サクランボに興味をもった子どもの姿や収穫して食べている姿、油粘土や紙粘土でのサクランボ作りの様子等)をボードフォリオで保護者に知らせ「親子でサクランボ狩り(紙粘土で作った物)をしましょう」と呼びかける。

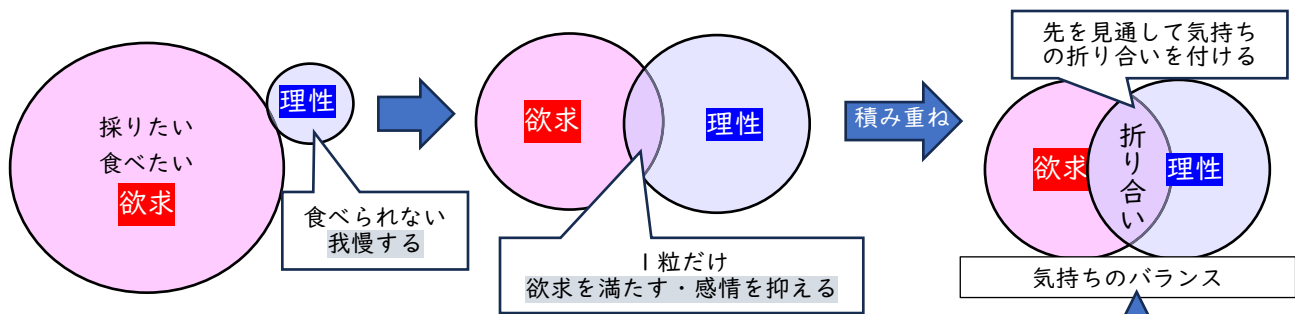


— 「いっぱい!」 — (5月15日)

子どもたちと一緒に「お家の人と一緒に採ってね。サクランボ狩り楽しみだね」と伝えながらサクランボの木に製作した実を木に吊るす。「いっぱい」と嬉しそう。降園時に、自分が作ったサクランボを親子で収穫し、保護者から「おいしいそうなサクランボだね」と言われ、ニコニコ笑っている子どもの姿があった。初めてサクランボの木を見たという保護者もいたので、園庭の木々の話をするきっかけにもなった。



○早く採りたい、食べたいという思いが強いからこそ気持ちが抑えられないアオ。理性よりも自分の～したいという欲求の感情の方が上回っている。また、食べられないのは分かっているけど採りたいという意識の中で、1粒だけ採るというアオの行為は、自分の欲求を満足させる行為と共に感情を抑える行為にもなっており気持ちのバランスを保とうとする行動であると思われる。このような積み重ねによってこれから先、気持ちの折り合いを付けるという過程につながっていくのではないか。



☆様々な体験を積み重ねることによって、自己感情のバランスをしなやかに保てるようになると思われる

○サクラの実では、同じようではないというコトミの気づきや一緒に行動していないにもかかわらずアオの様子をよく見ていることから、同じようにしたいという気持ちの表れのように感じた。

- 1分もしない間に「もしかして赤くなっているかも」という気持ちになる「アオ」は、時間という感覚をどう感じとっているのだろう。1分では赤くならないことや、毎日登園後すぐにサクランボを見て日々の色付きの変化を実体験していく中で、少しずつ感覚として分かってくるのかもしれない。好奇心が継続し実体験でこそ得られる感覚は、これからの基盤になっていくだろう。
- 本物のサクランボの経過を見ていた子どもたちは、紙粘土で自分のできることで再現しようとする姿があった。保育者においても紙粘土の染色を数色にし、子どもたちが自分で混ぜたり組み合わせたりできる工夫をしたことで、より本物らしいサクランボになった。さらには親子で楽しめるサクランボ狩りにもつながっていった。本物の自然に触れたり、時間の経過を感じたりしたことがその後の子どもたちの思考や製作意欲につながっていることから、体験を通して学んでいく過程の重要性を改めて強く感じた。
- 3歳児の姿を追っていくと、家族という世界から集団生活の世界の中で様々な人の言動を見聞きすることで「何してるの」「どうして?」という好奇心がより多く生まれていると感じる。

エピソード3 4歳児 どうする?たんぽぽ組 (2023年4月)

自転車でサクランボの木に立ち寄ったアオイ、フウマ、ミツキが「サクランボなっとる!」「これ食べれるんで」「あつ!あそこ赤くなっとる」と、まだ食べるには少し早いオレンジ色のサクランボを見上げてロク々に言っている。去年は、もうすぐ食べられると楽しみにしていた赤い実を、すべてカラスに食べられてしまった。クラスみんなに園庭でアオイ、フウマ、ミツキが話したことを伝えると、今年こそはサクランボを食べたいという思いがどんどん強くなり“どうやったらカラスからサクランボの実を守れるか”という“たんぽぽ会議”が始まった。

— サクランボを守るために、どうする?たんぽぽ組 —

フウマ：手を広げてサクランボを守る

ミツキ：夜になったらどうするん?みんな、家に帰っちゃうじゃんか

フウマ：あー

チハヤ：それなら、見張ったら?

ミツキ：でもやっぱり夜になったらみんな帰っちゃうじゃん

アオイ：ロケットに乗ってみるのは?

ミツキ：でも小さくて見えないんじゃない

アオイ：じゃあ、別のご飯を用意するのは?

保育者：なるほど。それもいい考えだね

ココミ：あんな、あんな・・・みんな赤くなるまで我慢する

保育者：カラスだけでなくみんなも我慢して待つんやな

リンカ：種を植えて木を増やしたらいいんじゃない

保育者：木を増やしてカラスも食べれるようにしてあげるんや

リンカ：うん。そう

ユウキ：スーパーヒーローが守る

ハル：水をあげる

保育者：水をあげないと枯れちゃうもんね。それにカラス以外からも守らないといけないもんね

ハル：そうそう虫とかさ

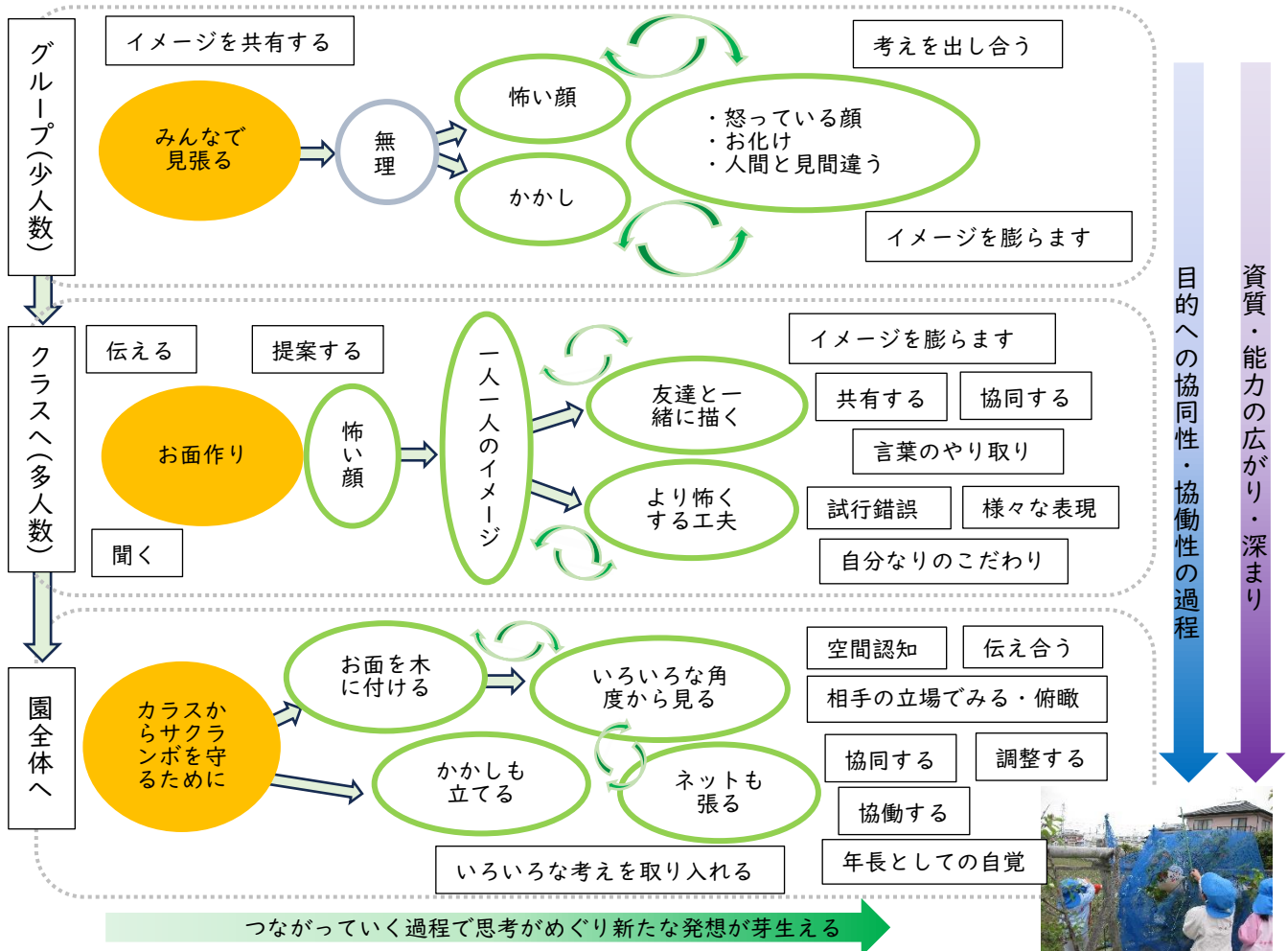
フウマ：みんなで紐をつけてカラスが来ないようにしたらえん。みんなも紐に引っ掛からないように気を付ける

ミツキ：じゃあさ、透明の割れないものを被せたらいいんじゃない!

そして「うん!それぞれ!」と頷き“たんぽぽ会議”は終わる。

この“会議内容”を保育終了後に保育者同士で共有し、翌日5歳児に伝えた。5歳児はサクランボを守るために怖いお面を作っていた。そして、そのお面やかかしを立てたり、ネットを保育者とサクランボの木全体に覆い被せたりした。4月25日、その成果あってか赤くピカピカの実はカラスに食べられることなく、子どもたちが美味しく食べることに成功。子どもたちは木から実をちぎっては水で洗いパクッと口に入れては「おいしい」「甘い」「もっと食べたい」と満足げな顔。そして、食べた後の種をサクランボの木の近くや畑、園庭のいたるところに穴を掘り、一粒ずつ埋めていた。

みんな出来上がると、それぞれサクランボの木に吊るしに行く。前ばかり付けていると、ソウタはフェンス際の後ろに回って「こっちにもいる」と言うと、他の子どもたちも「下の方にもいるよ」といろいろな角度から見るために、木を一周しながらしゃがんだり背伸びをしたり話したりして付ける場所を決めていた。



○昨年の出来事を思い出し、小さな集団から始まった“サクランボを守ろう！大作戦！”。1年前という期間を経ても、4・5歳児や保育者が共有していた出来事だからこそ「サクランボを守りたい」という目的が、小さなグループ→クラス(大きい集団)→園全体へ広がってもすぐに共有することができていた。

○提案したことがすぐに受け入れられる様子から、目には見えない、あるいは忘れていた興味・関心の芽生えである同じような思いが呼び覚まされ、目的に向かって一人一人の思いや考えをもちながら、それが友達の思いや考えにつながったり、つながることによって新たな思いや考えをめぐらせたりしながら、それぞれがよりよいと感じられる方向へといざなっている。

○一人ではこれまでの経験からの資質・能力を駆使しながらよりよい方向性に向かってしていくのだが、そこに集団という同じ目的意識をもつ仲間が刺激し合っていくことにより、一人一人の資質・能力の広がりや深まりが見られた。

エピソード5 こだわりをもって“流したい”ウォータースライダー 5歳児 (2023年6月)

☆いろいろな新しい情報を赤下線、思いをめぐらせている行動や姿あるいはその姿からの内面を青下線、思いや考えをつなぎめぐらせることによって生まれた新たな発想や行動を■、友達の関わりで生まれる協同性や協働性を■、資質・能力の広がりや深まりを■と表す。

— 「人形にする？」6月27日 —

6月中旬より続いているウォータースライダー。電車を流したい4歳児に「もっと強い水がいるよ」と勢いよく水を流すのを手伝ったり「ここはどう？」と流す場所を提案したりして異年齢で遊ぶこともある。この日、流すものを探している子どもたちは「何か他に流れるものないかなあ」と考えている。保育者が「私もスライダーで滑ってみたいなあ」と何気なくつぶやいたのを聞いていたアユミが「私たちは無理や」と答える。すると「人形にする？」とマドカ。リツキも「ポケモンとかあるやん」と言う。牛乳パックを開き、自分や好

きなキャラクターを描いたり「これ、先生やで」と保育者の絵を描いたりしながら会話が弾んでいる。

— 「すごい！ロケットみたい」6月28日 —

<場面①>

子どもたちは牛乳パックに描いた絵（以下、スライダー人形）を切り抜き、スライダーで流す。ところがスライダー人形は全く動かず流れない。「あれ？もう一回」と繰り返すが水だけが流れていく。じっと見ていたアユミが「これ（スライダー人形）が大きいから、止まってるんじゃない？」と絵が樋の両側に当たっていることや牛乳パックと樋の間から水が抜けていることに気が付き、それが原因かもしれないと、カリン、マドカ、タドルに伝えている。しばらく沈黙があった後、アユミは「そうだ！」とスライダー人形を手にとると「ここ、折ってみる」と、スライダー人形に折り目（V字）をつけた。流してみる。が、今度は折り目の上下に水が流れスライダー人形は流れない。どうやったら流れていくのだろうと考えているようだが、なかなかいいアイデアが浮かばない様子。そこで「今までいろんなもの流したよね。何が流れたかなあ」と投げ掛けてみると「(毛糸の)そうめん」「葉っぱのそうめん(トウモロコシの葉を細く割いたもの)」「金魚(ペットボトルのキャップ)」と思い出している中で、タドルが「金魚(ペットボトルのキャップ)は流れたよな。あれならいっぱいある。貼ってみる？」と言う。アユミ、カリン、マドカも「やってみようよ」とペットボトルのキャップを次々にスライダー人形の裏に貼り始める。貼り終わるとすぐにウォータースライダーへ。水を流すと、スライダー人形は樋を滑っていった。スライダーの最後までいくとイメージ通りだったのか「ヤッター！」と歓声。そして自分が滑っているかのように歓声をあげ、滑っていく様子を友達と伝え合いながら繰り返し遊んでいた。

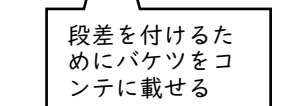
<場面②>

樋のつなぎ目が何かの拍子にガタンと離れ大きく隙間ができ、水は滝のように樋から樋に落ち流れて落ちた。マドカは「先生(の絵)も樋から樋へ流れるかなあ」と少し不安と期待が交錯したような表情で試し始める。そして保育者の絵のスライダー人形が樋から樋へ流れ、まるでスライダーをしているかのようにジャンプすると、タドルは「うわあ、ジャンプした！」と驚き、ウォータースライダーの最後のプール(タライ)にジャンプして入ると「プールに飛び込んだ」と興奮した様子。水を流すためには樋を繋ぐことを意識していた子どもたちだが、樋と樋の間の段差や隙間でも水が流れたり、物がジャンプしてもつながったりすることに面白さを感じている。

<場面③>

タドルが何を思ったのか「ペットボトル、流してみようか？」と保育者に声を掛けてきたので、一緒にペットボトルを取りに行く。タドルは112mlのペットボトルを手にとったので、保育者は500mlのペットボトルにする。蓋の方を下向きにし、カリンの「いくよ」の合図で水を流し入れると、ペットボトルは少しバタバタする感じはするが勢いよく滑っていった。タドルはペットボトルを手にとると今度は底を下向きにして挑戦。バタバタ感が少し抑えられているためか「さっきより何か速い感じがするなあ」と言う。タドルは「水を入れたらどうなる？」とペットボトルに水一杯にして流す。樋の一番下のプール(たらい)でずれを調整していたリツキが「さっきより速くなったよ」と明らかに速くなったと感じたのかびっくりした様子。タドルも早く流れるのを感じたようで「速かったよな」と顔を見合わせている。リツキは「もっと高いジャンプにしよう」、タドルは「これをもっと高くしたらいいんとちがう？」と樋の支えにしていたコンテナの向きを変えてみたり、バケツを挟んだりしながら高低差ができるようにあれこれ組み合わせていた。

樋の段差をもっとつけるために、さらにバケツをコンテナに載せると、段差でガタン！と大きな音を立て落ち流れていくそのスピードに、リツキは「すごい！ロケットみたい」と言いながら、ゴールするごとにずれる樋を丁寧に直していた。一方、タドルはペットボトルの水を半分にして流してみる。水が満タン入っていた時よりも滑り

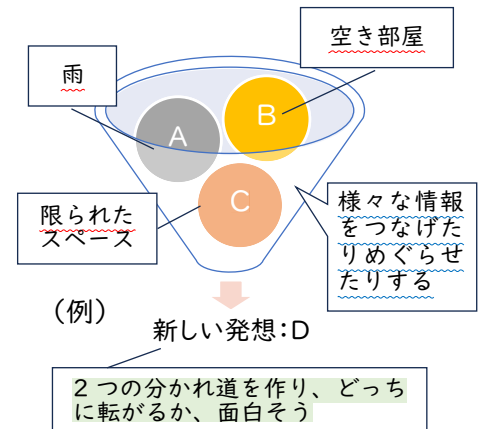


が鈍くなるのが分かったのか、首をかしげながら苦笑い。いろいろ試した結果、大きくて水がたくさん入ったペットボトルの方が速いと言う。スタートからゴールまで自分の走りと競争(スピード)、音の大きさ(速い方が段差で大きな音がする)の違い、がその理由。

— 「もう1回やってみよう」7月5日 —

雨が昨日から降り、園庭でのウォータースライダーができない状況がある中、どうしてもやりたいという思いが強いソウタとタドルは、昨日、空き部屋に樋を持ち込んだ。空き部屋のスペースは限られ、園庭のように長くつないだり水を流したりすることは難しくすぐに飽きている姿があった。

今日も樋をつなぎ始めながらソウタは「2つに分かれるようにしよう」「どっちかにボールが転がるようにしよう」「その方が面白いやん」とイメージや思いをタドルに伝えている。そこでタドルと何やら相談すると、牛乳パックを2つ持ってきてハサミで切り込みを入れ、樋の先にくっつける。流すものは水がなくても転がりやすいピンポン玉。いざ転がしてみると、いつも片方ばかりに転がってしまう。分かれ道になる部分を覗き込むソウタ。タドルは、牛乳パックの角度を微妙に変えていく。また、樋と牛乳パックが継ぎ目では、勢いがありすぎるとピンポン玉が跳ねて樋から飛び出してしまうようで、転がしては継ぎ目も微調整をしていく作業を何度も繰り返していた。カリンやアイカもやってきて転がっていく様子を見ながら「あーもうちょっとこっちかも」「こっち?」「そう」と伝え合ったり「勢いをゆるくする?」と高さを少し低くしたりしている。30分くらいたった頃、微調整がうまくいったのか、どちらに転がるか分からないようになる、予想できない偶然の面白さに夢中になっている。



— 「カーブするスライダーにしたら」7月14日 —

タドル、ユウガ、ケイスケが園庭でウォータースライダーの組み立てを始める。アユミが「カーブするスライダーにしたらどうなる?」とL字型の樋を持ってきた。アユミは昨日、樋の片付けをしていた時に倉庫にあったL字型の樋を見つけていた。そのアイデアはすぐに取り入れられ、樋の先端に取り付けられた。試しに水を流すとカーブして流れていく。アユミは嬉しそうに葉っぱそうめん(トウモロコシの葉を細く割いたもの)を少し手に取り流してみる。葉っぱそうめんもうまくカーブをすり抜けて見事ゴールのたらいへ飛び込む。タドルは傾斜ができるだけなだらかなるように、コンテナを樋の下に入れようとするが、早く完成させたいケイスケは「いいよ、いらないよ」と言って、葉っぱそうめんを流す。葉っぱそうめんは傾斜が急になった分、昨日よりも速く流れる。ミコモ「急な方でやって」と言う。流れるのが速いため、葉っぱそうめんがお箸でなかなか取れない面白さをイメージしているようだ。タドルと一緒にコンテナを運んでいたリョウも「それもいいね」。流れが速くなり、葉っぱそうめんはなかなか取れない。その面白さで歓声が。タドルも納得。ところが、勢いよく流れる葉っぱそうめんがお箸で取れず大量に流れるので、カーブで曲がらず詰まってしまう、水が溢れ出してしまう事態になってしまった。アユミに困り感が出てくるのでは、と保育者は見守っているとアユミは「もう、しょうがないなあ」という表情をしながら、詰まった葉っぱを手に取ってスタート地点へ持っていく。そのうち、嬉しそうに山の上へと何度も運んでいる。全体をよく見ると、水を流す子、葉っぱそうめんを樋に置く子、流れるそうめんを取ろうとする子、3・4歳児にお箸を渡す子、下まで流れたそうめんを山の上へ戻す子、ずれた樋を直す子、とそれぞれが自分の役割を見つけている。

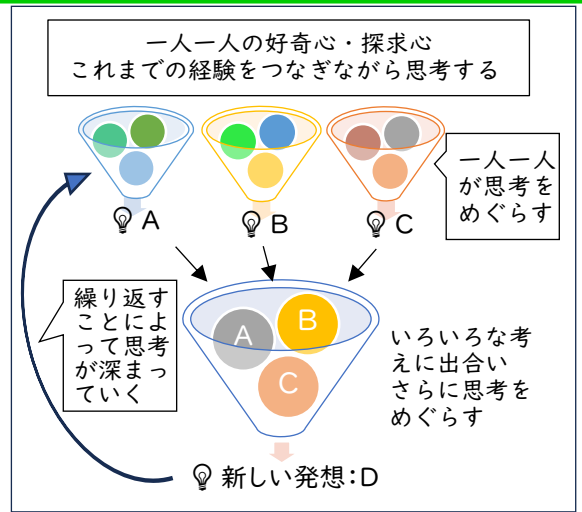


- イメージや思いを友達に伝えながら試行錯誤していく姿は、これまでの経験や昨年5歳児の模倣(記憶の蓄積)からやってみることにつながっているのかもしれない。このような体験を積み重ねながら、友達と同じ目的に向かって取り組む中で協同性や協働性をはぐくんでいる。また、存分に達成感や満足感を味わうことが新たな意欲となっている。偶然の出来事をプラスに捉え、失敗と言う捉えではなく面白さとして次へのミッションとして受け止め楽しんでおり、満足感から得られる次の満足感へとつながっている。
- 友達と関わって遊んでいると様々な情報が入ってくる。その情報をこれまでの情報とつないだり、自分の必要感としているものだけ取り入れたりしながら、可能性のあることや新しい発想が生まれている。

○友達と関わりながらの遊びでは、自分一人の時以上に様々な新しい情報が次々に入ってくる事が分かる。その情報から瞬時に自分の情報とつながって思いをめぐらせ新しい発想や好奇心となって表出される時もある。じっくりと考えをめぐらしていることもある。いずれにおいても体験を重ねることによって“今よりもっと”“より”と求めている姿から、好奇心や探求心が原動力となり、友達と関わることによって自分だけでは得られない思いや考えに出会い発想が豊かになってくる。またそれが繰り返されることによって深まっていくのではないだろうか。

【考察】

- 体験の積み重ねや年齢が上がるにつれ、好奇心・探求心の面白さを自分自身から身近な人へ伝えながら共有したり、伝え合うことで相手の意見と自身の考えをつなげたりあるいは自分にはない考えを自分の思いや考えとつなぎ合わせながら思いをめぐらしている。その繰り返しのよってさらに思考が深まっている姿がある。
- “ひらめき💡”の繰り返しが遊びに変化と楽しさを生み出し、面白さが加わると遊びへの探求は深まっていく。安心感を土台に同調や共感だけでなく、違う見方・考え方があっても批判ではなく議論として成り立っていく。
- 思うようにいかない経験があるからこそこれまでの経験を思い出してみたり、新たに自分で考えようとしたりする→イメージを伝える→友達と相談し合う→試してみる、という行動が見られたのだと思う。そして、よい方法を見つける→他のもので試してみようとする→アレンジを加えてみようとする→面白い変化に気付く、など「うまくいった」「面白い」「新たな発見」という感情体験の繰り返しをしている。その姿は、自分の考えや思いに自信をもったり、困難なことにも楽しみながらどうすれば解決につながるのかを考えたり、小さな変化に気付いたり、他の視点から物事見てみようとしたりするしなやかな思考が育まれていくのではないだろうか。
- 自然とは動植物だけではない。築山やでこぼこの地面など高低差や整地されていない場所も子どもには魅力的であり好奇心や探求心が広がる空間である。何気ない環境をさらに見直していきたい。



(3) 地域の人と関わる中で、新たな好奇心が芽生えていく

エピソード6 カブトエビ 発見！（2023年6月）

2022年秋、園の畑で育てたサツマイモを使ってカレー会食をし、2023年5月、今度はタマネギとジャガイモを収穫し再びカレー会食をした。その頃、園の隣の田んぼで代掻きをしている**地域の人**と話したこともきっかけとなり「今度にご飯を作ろう」と、ご飯=米=稲を育てることになった。種を水につけ、籾の先から小さな白い芽が出ると、籾撒きの準備完了。その間に、**保護者**に呼び掛けたり**地域の人**にお願いしたりして田んぼの土集め。ようやく集まったところでバケツやタライに田んぼの土が準備できた。そしていざ籾まき。1週間前にカップに水を入れて白い芽が出た種籾一粒一粒を土に載せ、チョンと指先で押さえる。このチョン加減が保育者にもなかなか難しいのだが、子どもたちは本当に丁寧にチョンとする。3歳児は「ご飯の種まいてるよ」と嬉しそう。少しずつ芽が伸びて、6月に入り、5・6本まとめて植え直した。

6月15日、カブトエビに詳しい**地域の人**を「カブトエビ先生」として田んぼの中の生き物について話を聞いた。カブトエビは昨年近くの田んぼで捕獲し身近な生き物ではあったが、あっという間に死んでしまい、どうやって飼育すればいいのか分からなかった。カブトエビ先生の話から、カブトエビは20日～長くても40日、だから7月の終わりにはもういない。生まれて10日で卵を産む。プランクトンや柔らかい草を食べる。雑草を食べたり、泥をかき回したりするので、稲にとって良い。卵は水がなくなっても乾燥しても冬になって寒くなっても生き続ける。春、土をかき回して光が当たり、水が入ると、孵化する。田んぼには



カブトエビ、ホウネンエビ、カイエビがいる。口はあるが食べるだけ（おしゃべりはしない）。いろいろな話を聞き、自分たちのバケツ田んぼをもっとよく見たいという気持ちが芽生えているのを感じた。

お話会の後、3・4歳児はたらい田んぼへ見に行く。保育者はカブトエビ、ホウネンエビをすぐに見つけたが、ナツは「エビフライはどこ？」と言いながら探す。ホウネンエビはしっぽが赤くエビフライの形に似ていたからだろうか。ホウネンエビは透明に近く、動きが速いので透明のカップにすくってみる。すると一度本物を見たからか、今度はたらい田んぼでもすぐに見つけることができていた。保護者は「子どもの頃、ホウネンエビのことを『ふわふわ』『もふもふ』って呼んでいた」と自分なりの名前を付けていたようだ。

翌日、昨日は何もいなかった5歳児のバケツ稲。登園するとバケツ稲のところへ行ってみる。「何かいる」とユウキやソウタの「カブトエビがいる！」の大きな声で周りに子どもたちが集まってきた。タドルは「ちょっと来て。なんかカブトエビじゃないのがおる」と小さな声で保育者に伝えに来た。一緒に覗き込み、黙って顔を見合わせ、お互いに目で合図(ホウネンエビだよね!)。ホウネンエビは準絶滅危惧種に指定されている県もあると聞いていた。その様子に気付いたサナやアユミが覗き込み「ホウネンエビがいる！」とタドルや保育者の気持ちを代弁。アイカはとても小さく泳ぎが速い生き物を発見。手ですくう。「これ、カイエビじゃない」とケイスケ。手のひらをよく見ると貝の形をしている。「よく見て！足があるよ」「カイエビかなあ、カブトエビの赤ちゃんかなあ」と悩んでいる。泳いでいる様子が見たいと、透明ケースに移し下から見ている子どもたちは「いっぱい足がある」「背中で泳いでいる」といろいろな情報を得ている。



- 昨年、園の近くの田んぼでカブトエビを捕まえていた5歳児。「手ですくえる」「かわいい」と興味や関心をもってはいたが、あっという間にいなくなったことで興味や関心は長続きしなかった。今年、カブトエビについて地域の人の話を聞き、自分が育てている田んぼで見つけたことでより興味をもった。
- 今後、見られなくなる可能性もあるホウネンエビやカイエビと出合ったことや、姿が見えなくなっても「きっと土に卵を産んでいるよ」という来年への期待感ができ、その時期になるときっと体験としてよみがえり新たに気づきや発見が生まれ積み重なっていく。だからこそ、実体験の大切さを改めて感じる。
- 保護者にとってカブトエビは、久しぶりの出会いだったり初めての出会いだったりした。これをきっかけに、登降園時に親子で田畑を覗きながら会話する姿がある。カブトエビだけではなく、オタマジャクシやカエル、ジャンボタニシなども目にし、地域の自然にも親子で目を向けるきっかけとなっている。

エピソード7 園庭も生きている(2023年6月~7月)

— 木にも名前があるよ 5歳児 — 6月

個人栽培で夏野菜の苗を植えた子どもたちは、自分の苗にニックネームを付け大事に育てていた。偶然、古い名札が落ちているのを見つけた子どもたちは、園庭の木にも名前があることに気づき新しく名札を付けることになった。子どもたちは新しい木の名札を手に取り「前にアゲハの幼虫がいた」と言うソウタの言葉に「あそこ!」とすぐにキンカンの場所へ走っていくユウキ。コトミは「さざんか」の名札に「冬にピンクの花がいっぱい咲いたよ」。きんもくせい「いい匂いがするやつじゃない? オレンジの小さな花をカップに集めたよね」とミユ。マドカは「あじさい」を手にとると「アジサイ、知ってるよ! 小さい花がいっぱい集まって大きなアジサイの花になるんだよね」とニコニコと話し「これ分かるよ!」と友達と園庭に走って行った。ところが「あれ? 確かこの辺りにあったと思うんだけど」とアジサイの前を行ったり来たりしていた。この時期はまだ花は咲いておらず、黄緑色の小さな蕾だった。マドカは「もしかしたら小さい花がいっぱい集まってると思ってたけど、大きな花が集まったのかなあ。きれいだなってよーく見てたから小さい花が集まってると思ったのかなあ」と少し気持ちが揺らんでいる様子。アユミは「ピンクの花が咲くよね」と自分の知っていることをマドカに伝えながら探していた。しばらくして「これかも...?」マドカがと言ったのはサンゴジュだった。アジサイの蕾のように見える。アユミは「これだったかなあ...」とちょっと首を傾げた。一人では少し不安がありながらも自分の体験や経験を思い出し、友達と会話することで記憶をたどり、その時の遊びの思い出と共に蘇っている。一方、木の名前を知らない、花は知っているが咲いていない時のことを知らず分からない、季節によって葉の色が変わることは知っているなど、園庭の木々が季節によって変化しめぐることを知るよい機会となった。

たしか、この辺にあったと思うんだけど...



— 親子で園庭オリエンテーリング 3・4・5歳児親子 —

5月、親子で園庭オリエンテーリングをする。ララは「私、ヤマモモ分かるよ、こっち、こっち」と母親を呼んでいる。先日、ララはヤマモモを探していて古い木の名札がかかっているのを見つけた。「これ、やまもも」って書いてる。同じ木が他にも

あるってことかなあ」とミユの顔を見る。ミユも「そうかも!同じ木を探したらいいね」と言うたらラが「えっと、葉っぱの形は…こうなってるんだね」と葉を見上げながら指で長細い形を描いた。するとミユは「あっ、なんか実が付いてるみたい」と指さした。二人は細長い葉の形と実がついていることを頼りに園庭の中を探し始めた。しばらくしてラが「ヤマモモの木、見つけた!」と走って来た。「ヤマモモだと思う。ほら一緒でしょ」と葉を見比べながら嬉しそう。それ以降、園庭の草花を使ってケーキ作りをしていた時も「ヤマモモの実かわいいから飾るといいかも」とヤマモモと名前と呼ぶようになったり、友達に「ヤマモモはこっちにあるよ」と伝えたりする姿が見られる。オリエンテーリングで保護者も園庭に植えている木・花・野菜の20種類一覧カードを見ながら子どもたちと探す中で「幼稚園にこんなにたくさんの種類が植えているのね」と驚いたり「これ、お母さん知ってるよ」と園庭を見まわしたり「まだ知らない木もあるからまたしたいね」と親子の会話が弾んでいた。

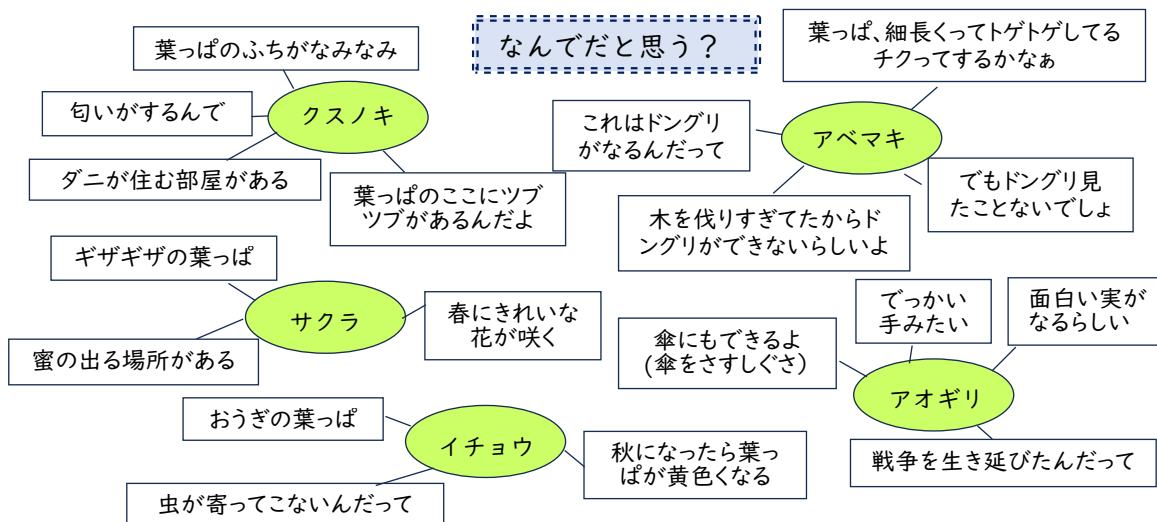


— 樹木医 “木のお医者さん”を招いて 3・4・5歳児 7月—

県内で唯一の樹木医さんが市内にいと知り、園に招いて園庭の木々について話を聞く機会をもった。まずはクスノキの話を聞く。樹木医さんが「葉っぱのここにツブツブがあるやろ?」と言うと子どもたちは「どこどこ?」と興味をもって樹木医さんの指先を覗き込む。「このプクッて膨らんでいるのは何でだと思う?」と聞かれ「おしゃれ?」と答える子もいたが誰も答えが出ない。「ここにはクスノキに寄って来るダニ(クスノキにとって良くない虫)を食べてくれるダニ(クスノキを守ってくれる虫)がいる部屋なんだよ」と教えられびっくりした表情。次に葉を匂ってみて「くさい!」。昔、クスノキの葉っぱは防虫剤に使われていたことも教えてもらい「あの匂いは虫も嫌いかもね」と5歳児は話していた。サクラ、アベマキ、アオギリ、イチヨウを一緒に見て回りながら葉の特徴を見ていくと、イチヨウは花束にもなる、うちわにもなる、飾りもできるよ、と子どもたちから次々と遊びでの体験が出てきた。触れ合いが多いほど、身近なものになっていくのを感じた。その後、木の図鑑作り。葉の特徴を思い出しながら作っていくが、あまり見ていなかったと思っていた3歳児も「ここかな?」と保育者と一緒に完成させていく。4歳児も思い出しながら、自分で完成させようとする姿があった。5歳児はすんなりと完成させ、特徴を友達と言い合っている。

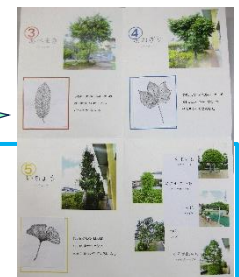


翌日、欠席していたリツキに「木のお医者さんから教えてもらったから、教えてあげる」とタドル、ソウタ、アユミ、コトミが駆け寄った。早速、園庭に出るとクスノキに誘い「木のお医者さん」が「なんでだと思う?」と問いかけながら話していたように、リツキにも同じ言葉や口調で問いかけ、葉を見せ、触れて、匂いを嗅ぎながら話していた。



5人は保育室に戻ると木の図鑑作りでリツキに葉のイラストを見せ、「どの木の葉っぱでしょう」とクイズを始めた。

木の図鑑



○特徴を捉える、知る面白さ、伝達する、調べる楽しさなど、5歳児だからこそ様々な資質・能力が広がっていることが分かった。また、樹木医さんから教わったことを友達に伝える=自分が知り理解したことを再度友達に伝えていくことで、得た知識が確かなものとなり、自信につながっていると感じた。

○子どもたちが、遊びの中でうちわにしたり花束にしたり虫が好きな木だったり自分が経験し積み重ねてきた知識に、専門家だからこそ知り得る園庭の木々の特徴や性質の知識が加わったことで、子どもたちにとって新たな興味や関心となる視野の広がりにつながる可能性となるかもしれない。

○葉の種類や特徴など図鑑でも知ることはできるが、見て、触れて、嗅いで、比べて、という五感をフルに使った直接的な体験があるからこそ、いつ見ても違いがはっきりと分かる子どもたちの姿がある。改めて実体験の強みを感じるとともに、この感性豊かな幼児期に必要な不可欠であると思った。

【考察】

- 当たり前にある園庭の木々や、年に数週間だけの動植物の生命との出会いに、自然のめぐりの不思議さ、神秘さを感じる。子どもや保育者だけでなく保護者や地域の人、専門家とともにその営みに目を向けてみることで、興味や関心の種がまかれたことだろう。その種がいつ好奇心・探求心の芽生えにつながるかは分からないが、いろいろな体験や視野が広がる機会を作っていきたい。
- 実物、名前、特徴全てに触れることで、子どもの記憶に残りやすい。また、植物は自分で移動できないため、人間がその場所に行かないと触れ合えない。どんな場所に咲いていてどんな虫が寄ってくるのか、友達と記憶をたどり会話しながら探す姿こそが好奇心や探求心が育まれている姿だと思う。自然の不思議さ、面白さに気付きやすい幼児期にこそ、自ら足を運んで自然に触れていくことの大切さを感じた。
- 園庭の植物等を通して気付きや発見、不思議さや感動を共有することで、自然の素晴らしさや命の尊さを改めて実感した。“園庭も生きている”この言葉の意味を保育者自身が心に留め、その時々や四季折々の小さな変化にも心を寄せ、子どもたちの豊かな発想の源となる自然環境との触れ合いを作っていきたい。

3 まとめ

園の身近な自然や環境に目を向け、子どもたちが自然や人と関わりながらどのように好奇心・探求心の芽生えや資質・能力がはぐくまれているのかを体験の積み重ねや年齢を追って読み解いていった。安心感を基盤に自然も人も自分事と受け止めて直観的で感情をストレートに表出する3歳児、現実と空想を行き来しながら少しずつ本題へとつながっていく4歳児、自分だけの考えにとどまらず、やりとりがなくても周りの状況にアンテナを張り、自分に必要な情報とつなげて取り入れようとする5歳児、と様々な経験が積み重なっていく（年齢があがる）につれ、情報の取り込みが多くなり、思考が頻繁につながりめぐったりし、その繰り返しによって視野や考えが広がったり深まったり、客観的な捉えができるようになっていくことが分かった。また、目に見える好奇心や探求心から、頭の中で想像やイメージをし、思考しながら好奇心や探求心への気持ちが高まっていく姿もあった。その過程において子どもたちから多く聞かれた言葉が「もしかして」という言葉である。いわゆる仮定・予測である。「もしかして」という子どもなりの想像が、好奇心や探求心には大きく影響しているのではないかと考えられる。今後はその子どもたちの「もしかして」の仮定・予測がどのように導かれるのかの過程をもっと丁寧に読み取っていきながら、科学する心と新しい創造について考えていきたい。

2022年度の取組から、園内や園周辺の身近な地域の自然や人に関心をもち、関わる機会を大切にしたり、保護者や地域に働きかけたりしていく必要感が生まれてきた。もっと地域の人と関わりを増やしていきたいと感じていた2022年秋、散歩の途中で工事をしていた人に土を分けてもらったことをきっかけに、子どもたち自身から田植えをしている地域の人に声を掛ける姿が見られた。保育者も地域の自然とのつながりをもちたいと模索していく中で、様々な分野において詳しい人が地域にいることを知り積極的にアプローチしていった。その結果、子どもが地域の自然を知るだけでなく地域の人々と触れ合うきっかけにもなった。「カブトエビ先生」に聞いてみよう、隣の田んぼの人に稲のことを教えてもらおう、と人から教えてもらうことや、知った知識をまだ知らない友達に伝えていこうとする姿は、新たな好奇心や探求心から生まれる意欲そのものだと感じる。大人も子どもも新しい情報や知識と出会ったことで、失われつつあった自然への興味・関心がよみがえったり、人への親しみを感じられたりする機会になった。感性豊かな子どもの姿は大人の意識までも変えていくのだと感じた。また、園庭など様々な環境は、子どもが関わることによって日々刻々と変わっていて、まさに生きている。そして、子どもを取り巻く身近な環境は目に見えるものばかりではない。身近な環境だからこそ、見逃しがちになっていることもある。今一度、保育者、保護者、地域の人々が身近な環境に好奇心や探求心をもち、子どもたちが心弾ませる環境を考えていきたい。

子どもたちには固定観念がなく、柔軟で未知の創造に溢れているにちがいない。その未知なる創造の源の種をまきつつ、子どもとともに楽しみ、面白がり、科学する心をはぐくむ保育者でありたい。